

おぼろ
びの
ま
伊 岡
都 部
子

物おどろ
びの味
伊岡
都都
子部

創元社

抄本 おむすびの味

© 昭和四十三年九月十日初版
昭和四十三年十一月十日三版

定価六〇〇円

著者首部伊都子発行者大坂市北
区桶上丁四十五番地矢部良策印
刷者大坂市浪速区元町五丁目五
百六十三番地伊藤佐久馬發行所大
市北区樋上町四十五番地創元社

郵便番号 五三〇

目

次

I

真 珠 層

も の の 種

- 睡眠……⁴ 神、薔薇を……⁵ 天女……⁶ 恕……⁷ 目がほしい……⁸
 黄金の鯉……⁹ 一せいに……¹⁰ 苦勞性の夏子……¹¹ もかもかと……¹²
 少年配達夫……¹³ 素直な目……¹⁴ 不可解……¹⁵ 流れのはて……¹⁶ 口
 実……¹⁷ 忍耐者……¹⁸ 貴族的と民主的……¹⁹ 生活を大切に……²⁰ 大
 草原……²¹ 禍いのあるわけ……²² 目がさめたら……²³ 生命ある間……
 24 光り……²⁴ のびる若竹……²⁵ 横の親しみ……²⁶ 生命を惜しむ……
 27 肉体の美……²⁸ カンボジアの蚊……²⁹ 洋子ちゃん……³⁰ 海の星……
 ……³¹ しまいぶろ……³² 花の仙人……³³ わろき友……³⁴ よき友……³⁵
 金蘭簿……³⁶ 横ずわり……³⁷ 足の裏……³⁸ 行進……³⁹ 自分の力……
 40 私もタルチュフ……⁴¹ 敬老会……⁴² 輝き眠る……⁴³ 真珠層……⁴⁴
 考えること……⁴⁵ 謎ばかり……⁴⁶ 翼ある住家……⁴⁷ ジーキル……⁴⁸
 生きる勇氣……⁴⁸ 弟子一人ももたず……⁴⁹ 人らしき人……⁵⁰ 富は徳の
 荷物……⁵¹ ひびくもの……⁵² バッカス……⁵³
 ものの種……⁵⁵ あれちのぎく……⁵⁶ 同じ位置に……⁵⁷ 何が真実……⁵⁸
 義眼はろり……⁵⁹ インドの檜山……⁶⁰ 老人たち……⁶¹ 生命の足音……

おむすびの味

62 胸から胸へ…… 63 言葉のおれぜんと…… 64 ほん
 とうの色…… 65 漫才…… 66 埃の中…… 67 限る…… 68 心をこやかに
 …… 69 仏様のお顔…… 70 花束…… 71 うとみしか…… 72 アタマ、サヨ
 ナラね…… 73 返事に困る…… 74 集金…… 75 忘れないで…… 76 真の知
 己…… 76 ほんとの不幸…… 77 わが仲間…… 78 足りない言葉…… 79 ゆ
 きちがい…… 80 孤独…… 81 普遍のことを…… 82 楷書…… 83 琴責め……
 …… 84 悪癖…… 85 無菌動物…… 86 点字騰写版…… 87 皺…… 88 雪積め
 ば…… 89 かもめ…… 90

むすびの味

おむすびの味…… 91 腰ひも…… 92 竜胆の着物…… 93 寝巻…… 94 枕の
 こと…… 95 髪のはじめ…… 96 眼…… 97 耳…… 98 唇…… 99 寒べに……
 99 コンパクト…… 100 天庭…… 101 うしろ姿…… 102 ハンカチの幕…… 103
 プレゼント…… 104 空箱…… 105 雑巾…… 106 櫛…… 107 古風な家でも……
 108 それとはなしに…… 109 手ぬぐい…… 110 履物のほこり…… 110 住所……
 …… 111 美貌…… 112 貯金…… 113 ご飯杓子…… 114 女のごよこび…… 115 お
 ふとんだけは…… 116 ふとん干…… 117 靴みがき…… 118 ご短慮…… 119 おお
 人柄…… 120 棄てっぷり…… 121 選品…… 122 柿の葉…… 123 掃除婦さん……
 …… 124 呼出し電話…… 125 おりるとき…… 126 節度と愛嬌…… 127 おめでた
 い席…… 128 生活の中に…… 128 朝の食卓…… 129 夫の鎧…… 130 おこげ……

2

愛のきずな

きよう この日こそ

- ……¹³¹ お化粧以前……¹³² 化粧法……¹³³ 化粧品匂い……¹³⁴ ふきん……
¹³⁵ 寒苦鳥……¹³⁶ ついに見つけたもの……¹³⁷
 詞に徳を……¹³⁸ なめらかに……¹³⁹ ご要心……¹⁴⁰ 悪声を出さず……¹⁴¹
 告げぐち……¹⁴² 否という勇氣……¹⁴³ おりふしに……¹⁴⁴ わかりやすい言
 葉……¹⁴⁵ 女のジェラシー……¹⁴⁶ 正直な敵……¹⁴⁷ 一人の時間……¹⁴⁸ 自
 分の巣……¹⁴⁹ 約束とパイの皮……¹⁵⁰ されど仲よき……¹⁵¹ 肩をくむ心……
 ……¹⁵² 花の里帰り……¹⁵³ 笑いごえ……¹⁵⁴ 心を食らう……¹⁵⁵ 上等の人間
 ……¹⁵⁶ 晨に別れを……¹⁵⁷ 平凡な顔……¹⁵⁸ 何月何日さん……¹⁵⁹ 今日と
 ……¹⁶⁰ 仕事の意義……¹⁶¹ ノコギリのように……¹⁶² 受付の少女……
 ……¹⁶³ 職場の和……¹⁶⁴ 上に立つ人……¹⁶⁵ 客を厭わざれど……¹⁶⁶ 言葉の
 ……¹⁶⁷ バイキン……¹⁶⁸ 女のうそ……¹⁶⁹ 人の親切も……¹⁷⁰ きよう この日こそ
 ……¹⁷¹ 命短し……¹⁷² 習慣……¹⁷³ 心を自由に……¹⁷⁴ 血をまぜて……
 ……¹⁷⁵ 受刑者……¹⁷⁶ 限界……¹⁷⁷ こぶし大……¹⁷⁸ 弁解……¹⁷⁹ おせんべい……
 ……¹⁸⁰ 富士山……¹⁸¹ その背後に……

父のうたえる

ロミオとジュリエット……………	184	自ら傷つく……………	185	若人……………	186	尾生……………	187
南国の情熱……………	188	恋ごころ……………	188	姫君の愛……………	189	お見合……………	190
らせて……………	191	星まわり……………	192	いつも試験……………	193	ミスゆえに……………	194
キドキしない……………	195	ヘルマンとドロテア……………	196	婚約中……………	197	すっかり……………	201
ね……………	198	風の中の羽根……………	199	捨てた糸だま……………	200	選びしのち……………	201
女の道……………	202	吾妹子……………	203	恋されて……………	204	相念わぬ人……………	205
慮……………	206	妬み……………	207	愛のきずな……………	208	これからの恋……………	209
には……………	210	失恋……………	210	異性……………	211	深淵に得る……………	212
わが心は大風の如く……………	214	正午の悪魔……………	215	真の恋……………	216	美婦良婦……………	213
… 紅芙蓉……………	218	背中の眼……………	219	トロイメライ……………	220		
おもしろいな……………	221	赤ちゃん……………	222	子守唄……………	223	ランドセル……………	224
あひるの子……………	225	小犬……………	226	悪書追放……………	227	おべんとうの顔……………	228
お鶴……………	229	父のうたえる……………	230	光度……………	231	特信部……………	232
こにも……………	233	子供の夢……………	234	泣く母……………	235	父母過あれば……………	236
りの少年……………	237	リズム……………	238	子の日記……………	239	親のとおりにする……………	240
らくがき帳……………	241	大きくなったら……………	242	学びたいのに……………	243	歳月を美しく……………	244
生れたいものだけが……………	245						

3

母 観 世 音

母観世音……………246 ざくろの聖母……………247 良人の母……………248 たとえ姑が……………249
 親と子……………250 またふところに……………251 ママ……………252 お父さま……………253 お姑
 さん……………254 生みの苦しみ……………255 ごめんなさい……………256 マグダラのマリヤ
 ……257 愛の極致……………258 うばすて山……………259 ひどいこと……………260 妻の健康
 診断……………261 妻の幸せ……………262 シジフォスの刑罰……………263 かなしきもの……………268
 易占……………265 妻の顔……………266 まさしく……………267 明暗のいどり……………268
 こんど生れるとき……………269 母……………270 永遠の女性……………271

れ ん げ 畑

のれん・鈴……………274 三色童……………275 白魚……………276 緑の羽根で……………276 雛まつ
 り……………277 三つ葉……………278 かなりや……………279 はつ蔵……………280 祇園の舞妓……………284
 281 亀の池……………282 浮生なる相……………283 現代子供氣質……………284 都わすれ……………
 285 わかうとする力……………286 れんげ畑……………287 金盞花……………288 散る桜……………
 289 手みやげに……………290 棕櫚……………290 蚊とんぼの屍……………292 藤の花……………293
 パラの花咲く……………294 白牡丹……………295 五月一日……………296 エンドウの花……………297
 散ることも……………298 泥だんご……………299 野草……………300 エンゼル……………300 やがて

あ	冬の星……	367
と	あたたかな匂い……	371
が	丸かぶりずし……	368
き	寒い朝……	372
	氷の下に……	369
	蠟涙……	373
	お稲荷さん……	370
	……	375

抄本

おむすびの味

I

真 珠 層

睡 眠

朝、はっきりと目がさめてから、ひととき、これはいったいどこで、どうなっているのだろう……というような感じをおもちになったことはございませんか。

お酒をのんだあと、前後不覚に寝入った方はともかく、全然お酒をたしなまない私などでも、気がついたときにすぐ、私であることを思い出せないで、しばらくじっとしてからやっと自分を自覚することがよくあります。

よく眠っている人を、急に驚かせたら生命がなくなる……などと申しますが、人間が眠っている間はほんとうに一時的に死んでいるのも同じようなものでしょう。かといって眠るのを惜しみ、おそれているわけにもまいりません。考えれば考えるほど、眠ることがふしぎで仕方がないのです。

ボオドレエルも、その感想私録の中で

睡眠―毎晩くりかえされるこの危険な冒険―

とっています。眠ることに人は非常に大胆だとあきれているのです。

神、薔薇を

西条八十氏の詩の中に、

神、薔薇を

念^{おも}ひたまへば

紅き薔薇

この世に咲きし

という、やさしい章があります。

神様が、ばらを、とお思いになったら、ばらの花が生れたように、人間をとお思いになった時、人間が生れたのでしょうか。

人間には、こんな力は、とてもありませんが、それでも空想することのできる魂を恵まれました。そして自由に、真夏に水仙を連想してその香りをかぎ、真冬に桜の花びらを浮かせて、流れゆく川

面を、思いみることもできます。現実には在り得ないことでも、心の目には認識でき、展開できるこの力のふしぎさ。

さびしい時には、いとしい人々を思い、悲しい時には幸せの日を思つて、たくさんの人が、いろいろの現実の苦しみに、耐えているのです。

天　　女

むかしむかし、一人の若い漁師が三保の松原にでて働いていて、ふと松の枝にかけられたうすく清らかな衣裳をみつけました。

あまりに美しく、これまで見たこともない不思議な衣裳だったので、漁師はそれをもつてかえて家の宝にしようとしたのですが、それは珍しいのも道理、天人の羽衣はごろもだったので。

でも羽衣を奪われた天人はその羽衣がないと天へ帰れないから、返して下さいと申します。若者はそれなら天の舞樂まがぐをみせてくれるようにと頼み、天人は先に衣を返してくれないと舞をまえないといいますが、漁師の方ではなかなかそれが信用できません。うっかり羽衣を返してしまつたらそのままするすると天上へのぼってしまうだろうと疑います。

「いや疑いは人間にあり、天に偽りいつわなきものを」